

中国や親中反日活動家と手を結ぶ 高金素梅氏の反靖国行動

本誌編集部

靖国神社を訴え来日

六月十三日、台湾の立法委員（国会議員に相当）である高金素梅氏以下「台湾原住民」であるとする一行五十三名が来日し、翌十四日「高砂義勇隊の魂を取り戻す儀式」のため靖国神社に入ろうとした。この日、境内では早朝より高金氏の行動に怒る日本人や台湾人有志約二百名が各門に待機していた。神聖なる靖国神社での衝突を恐れた台湾駐日代表処の職員や警察などは、高金氏に靖国神社境内へ入らないように説得し、また高金氏以外の一行がバスから降りないように求めたところ、高金氏側は断念して現場で抗議活動を行った。

そもそも高金素梅氏は、中国安徽省出身の軍人と台湾原住民（旧高砂族）の両親を持つ。女優を経て、原住民籍を取得して立法委員となった。今回は

大阪高裁での「台湾人靖国訴訟」（靖国神社などを相手取り、台湾原住民の英霊合祀取下げなどを求めるもの）控訴審出廷のため来日したのだった。

これに先立ち、台湾団結聯盟の蘇進強主席は四月五日、台湾の政党中央として戦後初めて靖国神社を参拝した。ところが、帰国した蘇主席らに対し、高金氏らは生卵や罵声を浴びせ、飛び蹴りまでくらわせた。その上で高金氏は「六月に原住民の英霊を奪還する」と宣伝した。来日直前には資金不足を訴え、「政府がやらないから自腹で日本

と渡り合うのだ」と演じた。

しかし、台湾のTV「民視」などの台湾派メディアは行程に箱根や富士五湖、愛知万博、京都などへの観光が含まれていることを暴露した。また高金氏は「日本に来るな」という脅迫状が届いたとして公開したが、葉書が国民党兵士を祀る忠烈祠の絵葉書であったこと、中国語の文体・筆跡などから、自作自演が疑われている。

中国、左翼の支援を受け

高金氏らは日本へ到着したその足で日本キリスト教団信濃町教会での集会に出席している。同教団内の台湾人教会で集会を行わないことは、台湾人の支持ではなく、別の思惑で高金氏が動いていることを暗示する。集会の主催者は「日本カトリック正義と平和協議会」。「女性国際戦犯法廷」と関連する左翼組織だという。

また、中国大使館は高金氏を「中国台湾省の住民」として、その安全を保



靖国神社に入ろうとして阻止され、警官を罵る高金素梅立法委員（6月14日）

護するよう日本政府に求めた。一行の半分は外省人（中国籍）だと言われ、国民党幹部も混じっていた。原住民の衣装を着て通訳したのは在台親中反日活動家・許介麟氏の妻、藤井志津枝（中国名・傅琪貽）氏だが、林建良氏は、高金氏を靖国訴訟に引き込んだのがこの藤井氏ら活動家たちだと指摘している（「正論」平成十五年九月号）。

集会では、高金氏が連れてきた元義勇隊員が「志願した」と発言。義勇隊は戦地に強制連行されたと主張する高金氏を慌てさせた。翌日、靖国神社入りを断念して掲げた横断幕には「高砂義勇軍は日本人ではない」とあった。「台湾人である」としないうのは、中国が「台湾人」という国籍を認めたくないからである。

十七日の公判では、高金氏が台湾人を代表しているのかという点から尋問が行われ、高金氏は二十四名の遺族からしか話を聞いていないと告白しながら、「しかし人数は問題ではない」と開き直った。判決は九月三十日。

高金氏らは十八日には「日韓友好団体」との交流を行った模様。帰国後、大学院受験のため訪中した高金氏に対し、中国当局は電話で歓迎を伝えた。

高まる反日気運の一環

四月以来、中国では日本の教科書採択、国連安保理常任理事国入り妨害のための暴動が発生。日本との関係を重視する李登輝前総統も攻撃の対象とされた。その中で、中国国民党の連戦主席一行が戦後初めて中国を訪問し、中国共産党と共同声明を発表した。中国との連携により台湾での発言力維持を図ったのだ。

そうした中、高金氏らの日本滞在中、台湾では日本との間で「漁業権騒動」

が起きていた。尖閣運動で政界入りした馬英九台北市長（国民党主席に就任）は、日本の不戦を見越して「一戦も辞さず」と息巻き、「漁民」のプラカードにはなんと「日米安保反対」、靖国問題、尖閣問題、また歴史教科書問題まで挙げられていた。台湾外交部を訪れた代表者は「高金の靖国訴訟を支持すべき」と迫った。「夏潮」（チャイナ・タイド）など、在台親中勢力の影が見え隠れする。日台両国では中国及び親中勢力によって国民分裂や日台分断の工作が進められているが、高金氏の反靖国行動は、そのコマの一つである。

*

六月十二日、靖国神社側が記者会見で、高金氏は三年前、すでに英霊持ち帰りの儀式を行っており、再び「持ち帰る」のは矛盾と指摘し、神社入りを拒否したことは高く評価されるべきであろう。また、日台有志が靖国に團結し、言論活動で高金氏の意図を挫いたことも記念すべき前進である。